

ホームレスに対するステレオタイプが 認知者のリスク認知に与える影響*¹

高橋 尚也*²・土肥 彩香*³

Effect of the stereotype for homeless on respondent's risk perception

TAKAHASHI Naoya and DOI Ayaka

Abstract

Despite having a certain risk that everyone becomes homeless, homeless is subject to social exclusion because it has negative images. In this study, we analyzed how the stereotype for homeless affects the risk attitude of the respondent oneself. As a result of analyzing the survey results that 140 respondents answered, the experience of contacting homeless was less than 10%, and respondents estimated the risk of themselves becoming homeless with interpersonal resources. Self-esteem and tolerance were involved in the background of risk perception that respondents themselves were homeless. By respondents having negative emotion based images for homeless or the images by internal attribution to homeless, respondents estimated low risk of themselves being homeless.

[Keywords] homeless, social exclusion, risk perception, stereotype

要 約

誰しもがホームレスになる一定のリスクを抱えているにも関わらず、ホームレスは否定的ステレオタイプが抱かれ排斥の対象となる。本研究ではホームレスに対するステレオタイプが回答者本人のホームレスとなるリスク態度にどのように影響を与えるかを分析した。140名が回答した調査を分析した結果、ホームレスへの接触経験は1割未満で、自身がホームレスとなることについては、対人的資源による低リスク認知が高く、ホームレスとなるリスク認知は低かった。自身がホームレスとなるリスク認知の背景には、自尊感情と寛容性が関与し、ホームレスに対して否定的感情ベースのイメージをもったり、ホームレスに内的帰属するイメージをもったりした場合に、ホームレスとなる認知者のリスク認知は緩むと整理された。

キーワード：ホームレス、社会的排斥、リスク認知、ステレオタイプ

問 題

社会心理学におけるステレオタイプ研究の文脈において、ホームレスは、「能力が低く、冷たい」や「嫌悪」といったイメージが抱かれることが明らかされ (Cuddy, Fiske, & Glick, 2007)、ホームレスは社会的排斥の対象として取り上げられることが多い。

日本において、ホームレスは、「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所として日常生活を営ん

* 1 本論文は、第2著者が第1著者の指導のもと提出した2015年度立正大学心理学部対人・社会心理学科卒業論文に含まれるデータの一部を、第1著者の研究関心のもと、第2著者の許可を得て第1著者が再解析したものである。また、本研究は、2016年度日本応用心理学会第83回大会（札幌市立大学）において発表された。

* 2 立正大学心理学部准教授

* 3 イシグロ株式会社

でいる者」と定義され、厚生労働省（2015）の実態調査では、東京23区や指定都市で全国の4分の3を占めることが報告されている。ホームレスのうち、路上ホームレスについて、岩田（2008）は、3つに分類している。第1の類型は、最長職は安定しており、路上直前まで普通住宅に住んでいた人々が急に路上へ出現した形態である「転落型（35.0%）」、第2の類型は最長職は安定しており、最長職のときから、あるいは路上直前に労働型住宅に移動し、その後路上へ出てきた人々である「労働住宅型（28.9%）」、第3の類型は、最長職の時から不安定食にある人々である「長期排除型（35.3%）」である。その上で岩田（2008）は、全体的には、ホームレスが学歴が相対的に低く、自分の家族形成がなされていない男性が中高年期に失業などを契機に路上に出現したという特徴が描けるものの、類型別に見るとかなりの差異があり、転落型や労働住宅型においてはその平均的特徴から大きくかけはなれていると論じている。これらの知見から、岩田（2008）は、ホームレスが路上生活前に通常の生活を営んでいることが多いと論じ、普通の人でもホームレスになる一定の可能性があると指摘している。高間（2006）は、ホームレスの実態に関する調査結果を整理し、ホームレスがホームレスになる前は仕事を持っており、「倒産・リストラ」「病気・高齢による失業」によるきっかけが多いことを示している。

このように、何らかのきっかけがあれば、誰しもがホームレスになる一定のリスクを抱えていると考えられる。Slovic（1987）は、人々のリスクイメージに関する2因子モデルを提唱し、制御が難しく、結末が致命的で、回避が難しいといった「恐ろしさ」と、観察不可能、影響が遅延的、危険かどうか分からないといった「未知性」に分類されることを明らかにしている。また、長瀬（2012）は、リスクを外敵などに対するリスクであるリスク1と、天災や現代社会のリスクであるリスク2に分類し、リスク2が過小評価されがちな背景について、次の5つに整理している。第1は、鮮烈なイメージが喚起しにくいこと、第2は、リスクの存在が距離的に遠く感じられること、第3は、起こる確率が比較的小さく、起こるとしても遠く感じられること、第4は、リスクにさらされる時間が長期間に及ぶこと、第5は、リスクとベネフィットのトレードオフが生起することである。

人々がホームレスとなるリスクは、長期的に継続するものであり、長瀬（2012）が指摘する第1、第3、第4の特徴をとくに反映しているものと考えられる。そのため、リスクの過小評価が生じている可能性が考えられる。

そこで本研究では、社会心理学におけるステレオタイプ研究の文脈をふまえ、ホームレスに対するステレオタイプが回答者本人のホームレスとなるリスク態度にどのように影響を与えるかについて、個人特性との関連を通して探索的に分析することを目的とする。

方 法

1 調査手続き

2015年7月に、集合調査形式で、個別記入型の質問紙調査を実施した。

2 調査対象者

首都圏の私立大学生計144名（男性41名、女性102名、不明1名、平均年齢19.17歳、標準偏差2.69）。有効回答数は140名であった。

3 分析項目

(1) ホームレスとの接触経験

独自に8項目設け、多重回答形式で回答を求めた。

(2) ホームレスに対するイメージ

半構造化面接から得られた回答を参考に、独自に44項目を作成し「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらともいえない」「4. ややそう思う」「5. そう思う」の5件法で回答を求めた。

(3) 回答者本人がホームレスとなるリスク認知

半構造化面接から得られた回答を参考に、独自に20項目を作成し、「1. まったくそうは思わない」「2. あまりそうは思わない」「3. どちらともいえない」「4. 少しそう思う」「5. とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。

(4) クリティカルシンキング志向性尺度

廣岡・元吉・小川・斎藤（2001）のクリティカルシンキング志向性尺度項目を用いた。

(5) 寛容性

World Value Survey (世界価値観調査) で用いられている 9 項目の日本語版⁽²⁾を用い、「1. とても嫌だ」「2. 少し嫌だ」「3. どちらともいえない」「4. あまり嫌ではない」「5. 全く嫌ではない」の 5 件法で回答を求めた。

(6) 自尊感情尺度

山本・松井・山成 (1982) が作成した尺度を用い、5 件法で回答を求めた。

(7) 性別・年齢

結 果

1 ホームレスとの接触経験

ホームレスとの接触経験について、図 1 の結果が得られた。その結果、「ホームレスを見たことがある」が 9 割で最も多く、次いで、「ホームレスについての話を聞いたことがある」が 3 割であった。このように、大半が目撃経験であり、実際にホームレスと接触した経験がある者は、1 割未満であった。

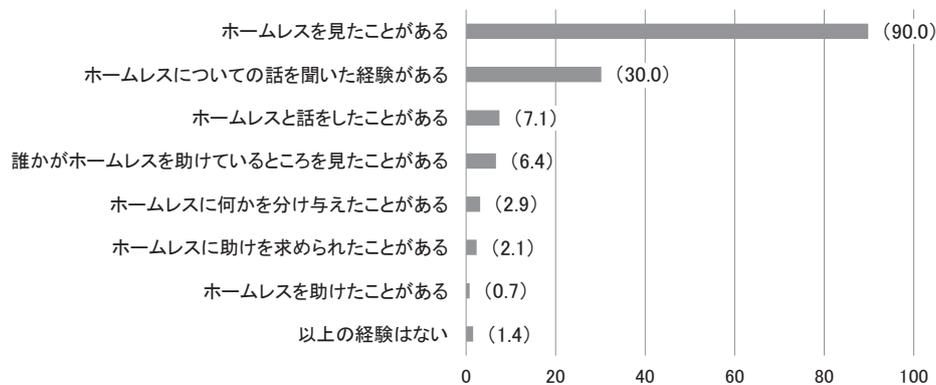


図 1 ホームレスとの接触経験 (%)

2 ホームレスに対するステレオタイプの構造

因子分析 (主因子法・プロマックス回転) の結果、解釈可能性から 5 因子が抽出された (表 1)。表 1 をみると、第 1 因子は「がんばらない」「努力をしない」など 14 項目から構成され『スキルと動機の欠如』、第 2 因子は「家族が犯罪を犯した経験がある」「親が離婚した」など 8 項目から構成され『家族関係の欠如』、第 3 因子は「不潔だ」「汚い」など 5 項目から構成され『嫌悪感』、第 4 因子は「本人が会社で失敗した」「本人が失業した」など 4 項目から構成され『社会的孤立』、第 5 因子は「暴力的だ」など 3 項目から構成され『恐怖感』とそれぞれ命名された。

各因子に高い負荷を示した項目に対する回答を因子の解釈の方向に合わせ加算し、項目数で除した値を尺度得点とした。尺度得点の記述統計を表 2 に示す。尺度得点の値が理論的中間点を上回っていたものは、「嫌悪感」と「社会的孤立」であった。

3 回答者本人がホームレスとなるリスク態度の構造

因子分析 (主因子法・プロマックス回転) の結果、解釈可能性から 3 因子が抽出された (表 3)。表 3 をみると、第 1 因子は、「家族がいればホームレスになることはない」など 8 項目から構成され、『対人的資源による低リスク認知』と命名した。第 2 因子は、「自分には一定以上の能力があるからホームレスにならない」など 5 項目から構成され、『能力評価による低リスク認知』と命名された。第 3 因子は、「兄弟姉妹を失ったらホームレスになる可能性はある」など 6 項目から構成され『高リスク認知』と命名された。

各因子に高い負荷を示した項目に対する回答を因子の解釈の方向に合わせ加算し、項目数で除した値を尺度得点とした。尺度得点の記述統計を表 4 に示す。尺度得点の値が理論的中間点を上回っていたものは、「対人的資源による低リスク認知」であり、「高リスク認知」と「能力評価による低リスク認知」の値は理論的中間点を下回っていた。

表1 ホームレス・ステレオタイプの構造

項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
がんばらない	.974	-.093	-.076	-.072	.029
努力をしない	.938	-.162	-.052	.018	.044
やる気がない	.878	-.086	-.006	.031	.068
甘えている	.870	.149	-.113	-.225	.012
意欲がない	.809	-.084	.084	.001	-.022
働く意志がない	.804	-.307	.033	.219	.008
問題解決能力がない	.728	.028	-.072	.125	-.066
コミュニケーション能力がない	.724	.149	.000	-.019	-.119
学習能力がない	.715	.191	-.100	-.100	.106
人生を捨てている	.664	-.097	.010	.112	.013
常識がない	.653	.130	.067	.008	.010
プライドがない	.645	.064	.012	.046	-.020
学力が低い	.594	.234	.112	-.108	-.003
街にただで迷惑な人だ	.481	.099	.207	.038	.173
家族が犯罪を犯した経験がある	-.030	.931	-.003	-.214	.092
親が離婚した	.063	.803	.027	-.146	.001
本人が犯罪を犯した経験がある	-.035	.800	-.074	-.014	-.002
親がいない	.109	.740	.042	.098	-.271
親が会社で失敗した	-.167	.692	-.044	.229	.197
親が失業した	-.193	.625	-.085	.312	.169
兄弟姉妹がいない	.177	.500	.101	.201	-.155
友達が少ない	.270	.443	.048	.215	-.098
汚い	-.077	-.064	.960	.022	-.033
不潔だ	-.026	-.032	.946	-.067	-.053
臭い	-.076	-.014	.842	.038	-.002
不快だ	.106	.071	.617	-.087	.103
暗い	.212	.003	.433	.024	.032
本人が会社で失敗した	.061	-.035	-.166	.897	.038
本人が失業した	-.018	-.040	.084	.801	-.034
独身である	.080	.029	.159	.613	.059
本人が離婚した	-.048	.210	-.077	.553	-.050
暴力的だ	.058	.000	-.016	-.025	.877
攻撃的だ	.059	-.001	-.078	.019	.868
怖い	-.024	.067	.312	.030	.516
因子間相関					
因子1	-	.401	.416	.301	.342
因子2		-	.150	.455	.262
因子3			-	.225	.244
因子4				-	.054
α 係数	.95	.90	.84	.82	.83

表2 ホームレス・ステレオタイプ尺度得点の記述統計

	<i>M</i>	<i>SD</i>	中点	α
スキルと動機の欠如	2.92	0.91	3	0.95
家族関係の欠如	2.45	0.81	3	0.90
嫌悪感	4.09	0.65	3	0.84
社会的孤立	3.72	0.88	3	0.82
恐怖感	2.89	0.93	3	0.83

表3 回答者本人がホームレスとなるリスク態度の構造

項目内容	因子1	因子2	因子3
家族がいればまずホームレスになることはない	.877	-.225	-.135
親と親密な関係が築けているからホームレスになることはない	.776	-.133	-.074
友人と親密な関係が築けているからホームレスになることはない	.749	.221	.207
兄弟姉妹と親密な関係が築けているからホームレスになることはない	.701	.010	-.036
自分が窮地に立たされても身内の誰かが助けてくれる	.678	-.073	-.163
友人がいればまずホームレスになることはない	.603	.285	.222
自分が窮地に立たされても友人の誰かが助けてくれる	.602	.212	.105
お金さえあればホームレスになることはない	.405	-.034	-.102
自分には一定以上の能力があるからホームレスにはならない	.004	.939	.017
自分はどんな環境の変化にも対応できるからホームレスにはならない	-.047	.910	.046
自分は社会でうまくやっけていけるからホームレスにはならない	.070	.845	-.023
自分はコミュニケーション能力が高いからホームレスにはならない	-.104	.832	-.108
職を失っても、また自分には職を見つけられる自信がある	-.029	.502	-.301
兄弟姉妹を失ったらホームレスになる可能性はある	.028	.040	.823
友達を失ったらホームレスになる可能性はある	.019	.109	.793
親を失ったらホームレスになる可能性はある	.068	-.189	.747
病気になったらホームレスになる可能性はある	-.110	.015	.722
自分にもホームレスになる可能性は十分にある	-.262	-.196	.505
職を失ったらホームレスになる可能性はある	-.052	-.164	.434
因子間相関	因子1	-	.574
	因子2	-	-.321
	α 係数	.88	.91
			.86

表4 回答者本人がホームレスとなるリスク態度尺度得点の記述統計

	<i>M</i>	<i>SD</i>	中点	α
対人的資源による低リスク認知	3.32	0.79	3	0.88
能力評価による低リスク認知	2.64	0.64	3	0.91
高リスク認知	2.47	0.83	3	0.86

4 その他の尺度構成

寛容性に関する9項目について、因子分析を行ったところ、解釈可能性から2因子解が採用され1項目が除外された。第1因子は、「異文化に対する寛容性」、第2因子は「疾患に対する寛容性」と解釈され、解釈の方向にあわせ加算し指標とされた。

表5 寛容性に関する因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	因子1	因子2
近所に「移民や外国人労働者」がいたら嫌ですか	.740	.030
近所に「自分と違う言語を話す人」がいたら嫌ですか	.726	-.061
近所に「同性愛者」がいたら嫌ですか	.687	.072
近所に「結婚していないカップル」がいたら嫌ですか	.651	-.252
近所に「自分と違う人種の人」がいたら嫌ですか	.629	.036
近所に「自分と違う宗教の人」がいたら嫌ですか	.442	.175
近所に「エイズ患者の人」がいたら嫌ですか	.137	.668
近所に「薬物中毒者」がいたら嫌ですか	-.151	.517
因子間相関	.347	

また、クリティカルシンキング志向性尺度と自尊感情尺度については、元論文に沿って尺度化し指標とした。

5 ホームレスに対するステレオタイプが本人のリスク態度に与える影響

ホームレスに対するステレオタイプが本人のリスク態度に与える影響を分析するために、第1水準に寛容性とクリティカルシンキング志向性と自尊感情、第2水準にホームレスに対するステレオタイプ、第3水準に本人がホームレスとなるリスク態度というように変数を分類した。その上で重回帰分析（変数増加法）の繰り返しによるパス解析を行った（図2）。その結果、自尊感情の高さはホームレスとなる低リスク態度を促進し、自尊感情の低さはホームレスとなる高リスク態度を促進していた。疾患への寛容性の低さは、ホームレスに対する恐怖感と社会的孤立を媒介して、対人的資源による低リスク態度を促進していた。異文化への寛容性の低さは、ホームレスに対する恐怖感を媒介して対人的資源による低リスク態度を、ホームレスに対するスキルと動機の欠如を媒介して能力評価による低リスク態度をそれぞれ促進していた。また、疾患への寛容性の低さは、ホームレスに対する家族関係の欠如を媒介した場合には高リスク態度を促進するが、ホームレスに対する嫌悪感を媒介した場合には高リスク態度を抑制していた。

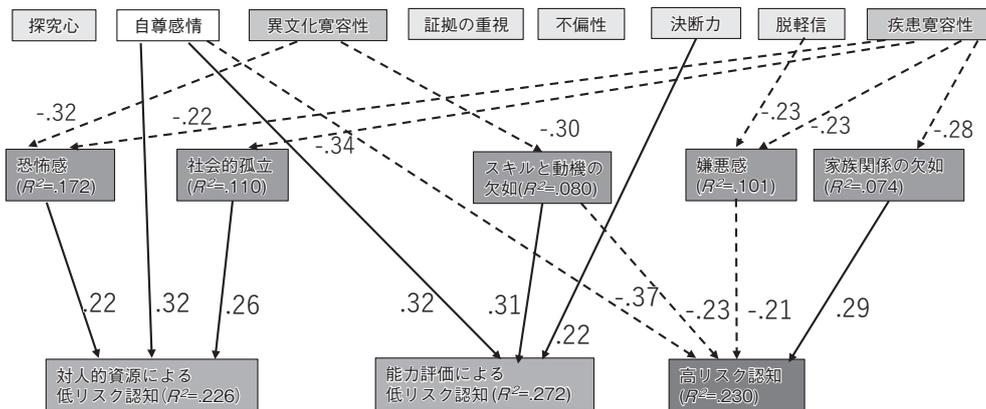


図2 回答者本人がホームレスとなるリスク態度を規定する要因
(数字はβを表し、実線は正の有意なβ、破線は負の有意なβを示す)

考 察

本研究では、社会心理学におけるステレオタイプ研究の文脈をふまえ、ホームレスに対するステレオタイプが回答者本人のホームレスとなるリスク態度にどのように影響を与えるか分析した。その結果、実際にホームレスと接触した経験は1割未満であり、自身がホームレスとなることについては、対人的資源による低リスク認知の得点が高く、ホームレスとなるリスク認知は低かった。この結果は、自分自身が身近な他者が守ってくれるという「安心」下にいるものと解釈される。

ホームレスに対するステレオタイプは、ホームレスに内的帰属を行う「スキルと動機の欠如」「社会的孤立」と、ホームレスに対する否定的感情を含む「嫌悪感」「恐怖感」と、ホームレスに外的帰属を行う「家族関係の欠如」の5側面が抽出された。なかでも、嫌悪感や社会的孤立に関するイメージが高く抱かれていた。自分自身がホームレスとなるリスクを高く見積もる要因は、寛容性の高さと自尊感情の低さ、ホームレスに対する嫌悪感が低く、ホームレスとなった要因を家族関係という外的要因に帰属することであった。他方、ホームレスとなるリスクを低く見積もる要因は、自尊感情の高さと、ホームレスに対する否定的感情を伴ったイメージであった。また、ホームレスイメージの内容と低リスク認知の理由とが対応していた。以上の結果から、自身がホームレスとなるリスク認知の背景には、自尊感情と寛容性が関与し、ホームレスに対して否定的感情ベースのイメージをもったり、ホームレスに内的帰属するイメージをもったりした場合に、ホームレスとなる認知者のリスク認知は緩むと整理される。

本研究では、ホームレスという社会問題に対して、社会心理学におけるステレオタイプ研究とリスク認知研究とを対応させて分析する試みを行った。その結果、大学生においては、リスク認知が緩む背景に他者が守ってくれるという安心があることが示され、長瀬（2012）のリスク認知のバイアスに関する知見に新しい知見を提供したと考えられる。ま

た、ホームレスに内的帰属をすることにより、自己とホームレスを切り離して認知している可能性を示した。このことは、ホームレスをはじめとする社会的排斥の問題を考えていく際に、対象に内的帰属をしたり、個人化するのではなく、社会的な課題あるいは環境的な要因として訴求することが多くの理解を得ることができるという実践的な示唆を提供していると考えられる。

本研究の限界として、大学生に調査対象が絞られていた点あげられる。そこで、第1の課題として、調査対象を拡大した際にも本研究と同様の知見が得られるかどうかを確認する必要がある。また、本調査の結果では、個人特性として、クリティカルシンキング志向性の影響が見られず、寛容性や自尊感情の影響がみられたことから、第2の課題として、一般的信頼などの寛容性との関連が予想される変数に注目した検討が必要と考えられる。

引用文献

- 廣岡秀一・元吉忠寛・小川一美・斎藤和志（2001）. クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究（2）三重大学教育実践総合センター紀要, 20, 93-102.
- 岩田正美（2008）. 社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属— 有斐閣
- 厚生労働省（2015）. ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果 〈<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000083546.html>〉（平成27年12月18日）
- 長瀬勝彦（2012）. リスクの認知バイアス：なぜリスクが過小評価されるのか 組織科学, 45(4), 56-65.
- Slovic, P. (1987). Perception of risk. *Science*, 236, 280-285.
- 高間 満（2006）. ホームレス問題の歴史・現状・課題 神戸学院総合リハビリテーション研究, 1, 135-147.
- WORLD VALUES SURVEY (2010-2012) 〈<http://www.worldvaluessurvey.org/WVSDocumentationWV6.jsp>〉（平成27年12月18日）
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子（1982）. 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

註

- （1）大学生6名に対して、ホームレスを見たときの個人の気持ちや自分自身がホームレスになるリスクなどについて、半構造化面接を実施した。
- （2）日本語版項目は、勁草書房ホームページ 〈http://www.keisoshobo.co.jp/files/9784326251162/9784326251162_1.pdf〉による。